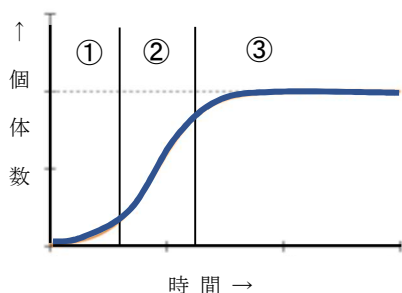




ふくろう通信では現在進行中の大きな時代の変化について様々な角度から解説してきました。今回は一連の話題の区切りとして、山口周氏（独立研究者）の主張を紹介します。

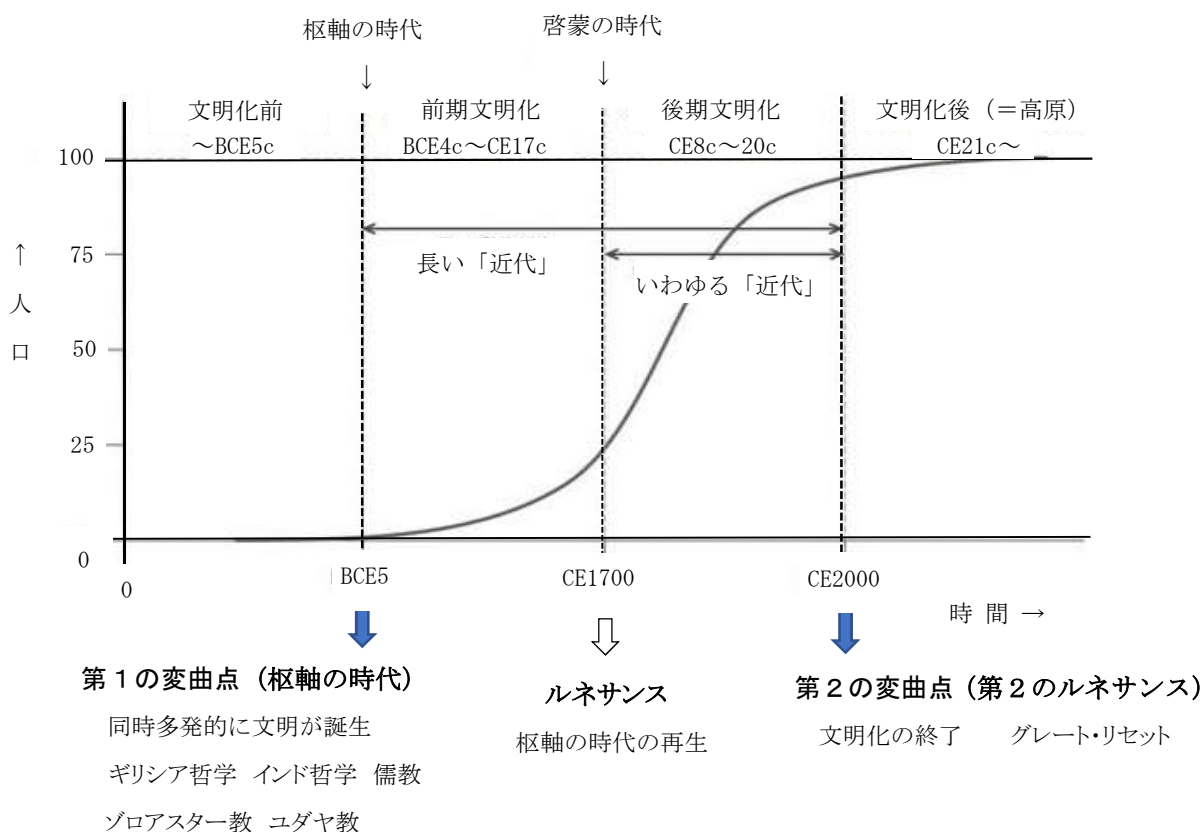
山口氏によると、人類は今 2500 年振りの変曲点を迎えています。まず次のグラフをご覧ください。これはロジステック曲線という生物の個体数の増加を予測するグラフです。



(参考)

ロジステック曲線は生物の個体数の変化を予測する方程式から個体数  $N$  と時間  $t$  の関係をグラフ化したもの。右図のようなS字カーブを描く。このように生物が環境に適応して増殖する時は、①はじめ徐々に増加率が高まり、②やがて加速度的に増加率が高まり、③最後に飽和点に向かって徐々に増加率が低下していく。

このロジステック曲線に人類史を重ねると驚きの真実が浮かび上がります。一見全く無関係な両者に強い関連性が見られるのです。紀元前5世紀頃の「枢軸の時代」に世界各地で同時に文明化が始まり、人口はゆるやかな上昇を始めます。その後、ルネサンスや産業革命を経て人口は爆発的に増加します。そして近年、モノが世界に行き渡るとともに文明化がほぼ終了し、人口増加率も低下、環境問題など成長の限界が見え始めます。これらの美しい一致に「神の見えざる手」のようなものを感じてしまうのは私だけでしょうか。



かつてマルサス（英 経済学者）は、人口は指数関数的に増加すると予測しました。多くの人がこれを信じましたが、その予測に反して1990年以降、世界の人口増加率は一貫して低下しています。やはり人口の増加も、他の生物同様にロジステック曲線を描いているようです。

また、経済の成長率も低下しています。景気には好不況の波があり、数年単位で見ると成長率が高まる時期もありますが、数十年単位で見ると低下傾向にあります。急速に進化するAIにも、経済を押し上げる力は無さそうです。例えばGoogleやAmazonのサービスで利便性が向上しても、それは主に他社の売上げを奪うだけでGDPが増えることはないでしょう。

このような状況から、山口氏は「人類の文明化は終了し高原に到達した。今後は真に豊かで成熟した社会づくりに取り組むべき」と主張します。そして、そのために「エコノミー（経済）にヒューマニティー（人間性）を取り戻す」ことを提案します。

一方、政治・経済界も変曲点の訪れを認めています。各国を代表する政治家や実業家が参加する世界経済フォーラム（通称、ダボス会議）の2021年テーマはグレート・リセットでした。グレート・リセットは、限界に近づく人類の生き方や働き方、交流のあり方等を一度リセットし、新たな社会・経済システムを構築すべきという考え方です。フォーラムの創始者であり、現会長であるクラウス・シュワブ氏は次のように述べています。

「ここ数十年の間に人類は驚異的な繁栄と進歩を実現した。しかし、その一方で、私達が地球環境に与えたダメージは深刻な問題を引き起こしている。また、物質的豊かさや目先の利益を過度に追求する新自由主義的な経済システムが、富の格差を広げ分断や怒りを招いている。このような状況にパンデミックが最後の一撃を加えた。古いシステムをリセットし、人々の幸福を中心に据えた持続可能で多様性を認める新たな政治・経済システムを構築する必要がある。」この指摘は山口氏の主張「エコノミーにヒューマニティーを取り戻す」とも合致します。

またシュワブ氏は、日本企業が新時代に果たす役割について次のように述べています。

「戦後多くの日本企業は、従業員の幸福や地域社会への貢献を視野に入れて成長した。新たな経済システムでは、このように目先の利益以上のものを求めて、幸福を社会に行き渡らせることが求められる。その精神が刻み込まれた日本企業は、フロントランナーとして良き手本となり得る。」

残念ながらシュワブ氏が言う戦後の企業文化は失われつつあります。その原因は、デフレ下での規制緩和（雇用の自由化など）や税制の間違ったルール変更にあったと考えるのは自然でしょう。人類が到達した高原社会をすべての人が真に豊かに生きるために、成長と分配の最適化を図る新ルールを議論すべき時が来ています。

## 「ビジネスの未来」 山口周



経済に人間性を取り戻す。新しい時代を創るために資本主義をハックしよう。

## 「グレート・リセット」 クラウス・シュワブ



ダボス会議で語られるアフターコロナの世界。何が起きているのか。これから何が起ころのか